＊サンプルは『こころ』の参考資料です。

補充資料

■先生に代表される「近代的知識人」の精神

1．夏目漱石「私の個人主義」（『定本漱石全集　第十六巻』二〇一九　岩波書店）

近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使うようですが、その中にははなはだ怪しいのがたくさんあります。彼らは自分の自我をあくまで尊重するような事を言いながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。いやしくも公平の眼を具し正義の観念をもつ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発展していくと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わないのです。（中略）

それだからその裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。すでに党派でない以上、我は我の行くべき道を勝手に行くだけで、そうしてこれと同時に、他人の行くべき道を妨げないのだから、ある時ある場合には人間がばらばらにならなければなりません。そこが淋しいのです。

■「遺書」の受け取り手としての「私」の必然性

1．三好行雄「『こころ』について」（『こころ』一九八一　新潮文庫）

父の臨終をみとる私のまえに遺書が届いたとき、かれは迅速な行為者に変る。父の安否を医者に確認することもなく、みじかい走り書きをのこしただけで、汽車にとび乗るのである。かすかな予調として現われていた父か、先生かの二者択一を迫られたとき、私は躊躇なく先生を選択した。主体を賭けたこの選択によって、かれは機能としての話者から小説的人物へ変貌したのである。それは、私ひとりに宛てて遺書を書いた先生の選択の正しさを証明する（後略）

研究資料

■「人間存在」を描く漱石の意識

1．夏目漱石「人生」（『定本漱石全集　第十六巻』二〇一九　岩波書店）

二点を求め得て之を通過する直線の方向を知るとは幾何学上の事、吾人の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方向を定むるに足らず、人生は一個の理窟に纏め得るものにあらずして、小説は一個の理窟を暗示するに過ぎざる以上は、「サイン」「コサイン」を使用して三角形の高さを測ると一般なり、吾人の心中には底なき三角形あり、二辺並行せる三角形あるを奈何せん、若し人生が数学的に説明し得るならば、若し与へられたる材料より、

Xなる人生が発見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は余程便利にして、人間は余程ふらきものなり、不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る海嘯と震災は、啻に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三寸の丹田中にあり、険呑なる哉、

2．夏目漱石「模倣と独立」（『定本漱石全集　第二十五巻』二〇一八　岩波書店）

私は往来を歩いて一人の人を捕へて、この人は人間の代表者であると思ふ、（中略）ある人は一人で人間全体を代表すると同時に彼一人を代表して居る、（中略）元来私はかう思ふ、法律上罪になることであつても、罪を犯した人間が、ありの儘にその経路を現はし得たなら、ありの儘にイムプレスし得たなら罪悪は最早ないのであると、それを然か思はせる一番いゝのは、ありの儘をありのまゝに書き得た小説である、そのものを書き得る人は、如何なる悪事を行ふたにせよ、秘しもせずに、洩らしも抜かしもせずに書いたなら、その功徳によつて彼は成仏することが出来ると思ふがどうだらう、それぢや法律はいらぬかと云ふと、そう云ふ意味ではない、如何に不道徳なことでも、その経過をすつかり書き得たなら、その罪は充分に消える丈の証明をなし得たのである、

☆追加資料

補充資料

■教科書未収録箇所

1．［下　先生と遺書　二］（『こころ』一九二七　岩波文庫）

私はそれからこの手紙を書き出しました。平生筆を持ちつけない私には、自分の思うように、事件なり思想なりが運ばないのが重い苦痛でした。私はもう少しで、貴方に対する私のこの義務を放擲する所でした。しかしいくら止そうと思って筆を擱いても、何にもなりませんでした。私は一時間経たないうちにまた書きたくなりました。貴方から見たら、これが義務の遂行を重んずる私の性格のように思われるかも知れません。私もそれは否みません。私は貴方の知っている通り、殆んど世間と交渉のない孤独な人間ですから、義務というほどの義務は、自分の左右前後を見廻しても、どの方角にも根を張っておりません。故意か自然か、私はそれを出来るだけ切り詰めた生活をしていたのです。けれども私は義務に冷淡だからこうなったのではありません。むしろ鋭敏過ぎて刺戟に堪えるだけの精力がないから、御覧のように消極的な月日を送る事になっ

たのです。だから一旦約束した以上、それを果さないのは、大変厭な心持です。私はあなたに対してこの厭な心持を避けるためにでも、擱いた筆をまた取り上げなければならないのです。

その上私は書きたいのです。義務は別として私の過去を書きたいのです。私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有といっても差支ないでしょう。それを人に与えないで死ぬのは、惜いともいわれるでしょう。私にも多少そんな心持があります。ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬った方が好いと思います。実際ここに貴方という一人の男が存在していないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでしょう。私は何千万といる日本人のうちで、ただ貴方だけに、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいといったから。

私は暗い人世の影を遠慮なくあなたの頭の上に投げかけて上ます。しかし恐れては不何せん。暗いものを凝と見詰めて、その中から貴方の参考になるものを御攫みなさい。私の暗いというのは、固より倫理的に暗いのです。私は倫理的に生れた男です。また倫理的に育てられた男です。その倫理上の考は、今の若い人と大分違った所があるかも知れません。しかしどう間違っても、私自身のものです。間に合せに借りた損料着ではありません。だからこれから発達しようという貴方には幾分か参考になるだろうと思うのです。

貴方は現代の思想問題について、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよく解っているでしょう。私はあなたの意見を軽蔑までしなかったけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかった。あなたの考えには何らの背景もなかったし、あなたは自分の過去を有つには余りに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足なそうな顔をちょいちょい私に見せた。その極あなたは私の過去を絵巻物のように、あなたの前に展開してくれと逼った。私はその時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。その時私はまだ生きていた。死ぬのが厭であった。それで他日を約して、あなたの要求を斥ぞけてしまった。私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているのです。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新らしい命が宿る事が出来るなら満足です。

2．［下 先生と遺書 三〇］（『こころ』一九二七　岩波文庫）

こんな風にして歩いていると、暑さと疲労とで自然身体の調子が狂って来るものです。尤も病気とは違います。急に他の身体の中へ、自分の霊魂が宿替をしたような気分になるのです。私は平生の通りKと口を利きながら、何処かで平生の心持と離れるようになりました。彼に対する親しみも憎しみも、旅中限りという特別な性質を帯びる風になったのです。つまり二人は暑さのため、潮のため、また歩行のため、在来と異なった新らしい関係に入る事が出来たのでしょう。その時の我々はあたかも道づれになった行商のようなものでした。いくら話をしても何時もと違って、頭を使う込み入った問題には触れませんでした。

我々はこの調子でとうとう銚子まで行ったのですが、道中たった一つの例外があったのを今に忘れる事が出来ないのです。まだ房州を離れない前、二人は小湊という所で、鯛の浦を見物しました。もう年数もよほど経っていますし、それに私にはそれほど興味のない事ですから、判然とは覚えていませんが、何でも其所は日蓮の生れた村だとかいう話でした。日蓮の生れた日に、鯛が二尾磯に打ち上げられていたとかいう言伝えになっているのです。それ以来村の漁師が鯛をとる事を遠慮して今に至ったのだから、浦には鯛が沢山いるのです。我々は小舟を傭って、その鯛をわざわざ見に出掛けたのです。

その時私はただ一図に波を見ていました。そうしてその波の中に動く少し紫がかった鯛の色を、面白い現象の一つとして飽かず眺めました。しかしKは私ほどそれに興味を有ち得なかったものと見えます。彼は鯛よりもかえって日蓮の方を頭の中で想像していたらしいのです。丁度其所に誕生寺という寺がありました。日蓮の生れた村だから誕生寺とでも名を付けたものでしょう、立派な伽藍でした。Kはその寺に行って住持に会って見るといい出しました。実をいうと、我々は随分変な服装をしていたのです。ことにKは風のために帽子を海に吹き飛ばされた結果、菅笠を買って被っていました。着物は固より双方とも垢じみた上に汗で臭くなっていました。私は坊さんなどに会うのは止そうといいました。Kは強情だから聞きません。厭なら私だけ外に待っていろというのです。私は仕方がないから一所に玄関にかかりましたが、心のうちではきっと断られるに違ないと思っていました。ところが坊さんというものは案外丁寧なもので、広い立派な座敷へ私たちを通して、すぐ会ってくれました。その時分の私はKと大分考が違っていましたから、坊さんとKの談話にそれほど耳を傾ける気も起りませんでしたが、Kはしきりに日蓮の事を聞いていたようです。日蓮は草日蓮といわれる位で、草書が大変上手であったと坊さんがいった時、字の拙いKは、何だ下らないという顔をしたのを私はまだ覚えています。Kはそんな事よ

りも、もっと深い意味の日蓮が知りたかったのでしょう。坊さんがその点でKを満足させたかどうかは疑問ですが、彼は寺の境内を出ると、しきりに私に向って日蓮の事を云々し出しました。私は暑くて草臥れて、それどころではありませんでしたから、ただ口の先で好い加減な挨拶をしていました。それも面倒になってしまいには全く黙ってしまったのです。

たしかその翌る晩の事だと思いますが、二人は宿へ着いて飯を食って、もう寐ようという少し前になってから、急に六ずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日自分の方から話しかけた日蓮の事について、私が取り合わなかったのを、快よく思っていなかったのです。精神的に向上心がないものは馬鹿だといって、何だか私をさも軽薄もののように遣り込めるのです。ところが私の胸には御嬢さんの事が蟠まっていますから、彼の侮蔑に近い言葉をただ笑って受け取る訳に行きません。私は私で弁解を始めたのです。